

国語

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

平成15年度から実施の高等学校学習指導要領を受け、平成18年度に試験科目が「国語」に一本化され、本年度は「国語」として9回目の試験である。

高等学校学習指導要領では、必修科目は「国語表現Ⅰ」及び「国語総合」の2科目とされ、生徒はそのいずれかを選択することとなっている。「国語表現Ⅰ」は適切に話したり書いたりする力など、現代の社会生活に生かすことのできる言語能力の育成を重視している。「国語総合」は「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」及び「言語事項」の3領域1事項から内容を構成し、古典と近代以降の文章を含む総合的な科目である。標準単位数は「国語表現Ⅰ」が2単位、「国語総合」が4単位である。

高等学校「国語」教科担当としての立場から、本年度の試験問題を検討した。検討を加える視点として次の6点を設定した。

- (1) 高等学校学習指導要領の目標・内容等にそった問題（素材文・設問）であったか。
- (2) 高等学校における授業や学習活動の実態に配慮がなされた問題であったか。
- (3) 受験者の基礎的・基本的な国語力を幅広く総合的に判定し得る問題であったか。
- (4) 素材文は「国語表現Ⅰ」「国語総合」の教科書で扱われる程度のものであり、高校生が読むのにふさわしく、魅力的なものであったか。
- (5) 設問は、内容・形式・選択肢などによく検討が加えられ、受験者の読解・思考過程を想定するなどの配慮がなされていたか。
- (6) 本試験との間で、問題の適否及び難易に関して不適切な較差はなかったか。

以上の視点に立ち、「試験問題の内容・範囲等」「試験問題の分量・程度等」「試験問題の表現・形式等」の面から、第1～第4問までそれぞれに検討を加えて、評価し意見を述べる。

2 試験問題の内容・範囲等

第1問 哲学者である田島正樹^{たじままさき}の『正義の哲学』からの出題である。出題箇所は第Ⅰ章と第Ⅱ章の間の「インテルメッツォ 現実とは何か？」の部分である。バーチャルリアリティを問題にしたSF映画『マトリックス』を引き合いに出し、我々が現実だと認識している世界が実は仮想空間かもしれないという可能性を提示している。その上で、「現実とは、ただ決断の瞬間にだけひらめき現れるもの」であり「我々のリアリティを支えているものが実際には理性ではなく信仰であり、信仰への決断である」と主張する。哲学的な言い回しも多く、文章の抽象度は高いものの、例示と意見の関係性が整理できれば論旨を読み取るのは難しくない。本試験と同様に段落番号が付されているが、総文字数は約3,900字で本試験よりも500字ほど少ない。

問1 すべて常用漢字であり、適切な出題である。本試験で出題された「軍功」のように咄嗟^{とつさ}

にイメージしづらい熟語の出題もなかった。

問2 「魔法にかけられているようなものだ」という比喩表現についてその内容を読み取らせる設問である。その後の「つまりは解釈によってまったく別様の読解も可能なものなのだ」を手がかりに、**4**の「それを一つの～自由を得るわけだ。」に説明されている現実と解釈の関係を読み取る問題である。哲学の前提となる部分を取り上げており適切な設問である。

問3 傍線部Bの数行前に「我々の経験の中には、これこそが疑いもなく現実の経験だという確証を与えてくれるようなものは、何一つないのである。」とあり、読み進めた後に傍線部がくるので、直前部分と内容が合致する選択肢を選び出すのは難しくない。

問4 筆者の主張の要となる「決断」の理解を問う設問として適切である。傍線部Cを含む**8**段落の内容全体を把握する力を求めている。

問5 傍線部Dの問いかけに対して、**12**に「未来への行動のひな形のようなものが、いくつか与えられている」と書かれているため、同段落の内容と問4で確認した「決断の事後的効果」を踏まえれば無理なく正答を選び出せる。

問6 本試験と同様、表現を取り上げた出題である。①は正解として妥当だと思われるが、③に述べられているように、接続詞のたたみかけが話題の移行と対応していると言えるかは不明瞭である。選択肢の表現にもう少し工夫がほしい。

第2問 ^{たかみじゅん}高見順の小説『午後』からの出題である。本試験と同様に作品全文を用いて、完結した小説世界を読み解いていく力を求めている。「親鹿鹿チャンリン」を自認する小説家「彼」の二歳の娘への愛情を軸にしながら物語は展開していく。知り合いの女流作家とお嬢さんの親子関係から、子供が親にとる態度というものを内省していく「彼」の心の動きを、短文を重ねた表現で丁寧に描いている。作品の狙いを含めて内容は非常に読み取りやすく、本文と選択肢を丁寧に見比べなければならないような設問も少なかった。本文の文字数は約4,700字で、本試験と比べて大幅に短くなったため、3行選択肢が4問あった割には負担感が少なかった。

問1 いずれも語句本来の意味を問う標準的な語彙問題であるが、1907年生まれの作家の小説でもあり、受験者には馴染みの薄い慣用表現も含まれていたかもしれない。

問2 「気分的に」仕事に追われているにもかかわらず、仕事を中断して可愛くてたまらない娘を見に来た「彼」のどっちつかずのあり方に気付かせる設問で、この後の展開を読み取る上で重要なポイントを確認させる適切な出題であった。

問3 主人公の心情を問う3行選択肢の設問であるが、根拠となる箇所が明確で分量も少なかったため、本試験に比べると解答にかかる所要時間は少なかったと思われる。

問4 成長した娘が父である自分をどのように思うか想像するうちに、年老いた母へと「彼」の思いが向けられていく本文読解の要所を取り上げた設問である。親に対する子供の態度をお嬢さん、由紀子、自分の場合と対比してとらえる必要があるが、3行選択肢だった割には、受験者は迷うことなく正答にたどり着けただろうと思われる。

問5 小説の結末部分における彼の心情を問う設問である。正解である①と③で迷った受験者がいたのではないかと想像される。③を排除する根拠となる箇所を本文から見つけるのは難しかったかもしれない。多様な解釈が成り立ちうる小説の結末部分を出題することに関しては、更なる検討を重ねていただきたい。

問6 本試験と同様に6つの選択肢から正解を2つを選ぶ設問であった。表現上の工夫や主人公の視点の移動に気付かせる問題である。本試験に比べて、設問と見比べる本文の分量が少なく、消去法によって明らかに外せる選択肢が中心だったため、負担感なく正答を選べたと思われる。②の「カギ括弧の活用」が「彼」の心の動きの技巧的な表現と言えるのかは意見が分かれるところである。

第3問 平安時代中期の物語『うつほ物語（菊の宴）』からの出題である。『うつほ物語』の後半は、当代の貴公子のあこがれの的であったあて宮を巡る求婚と政権争い、仲忠一族の繁栄の物語だが、本文は、入内が^{じゅだい}決まったあて宮に恋い焦がれる源宰相が、あて宮づきの女房兵衛の君に託してあて宮に歌を贈答する場面である。公私の行事描写の多い『うつほ物語』であるが、本文ではそうした描写もなく、ほとんどが源宰相と兵衛の君とのやりとりである上に、A～Fの和歌も設問によって誰が詠んだものかわかるようになっていて、数の多さも負担にならず理解しやすい。古文の基礎知識や基本的な読解力を問う題材として適当であったと考える。本文は約1,800字で、本試験よりも300字ほど多かった。

問1 語句の解釈を問う設問である。本試験の語句問題に比べると、単なる知識にとどまらず文脈に沿って適切に意味を捉える力が問われる良問である。

問2 基本的な文法事項を取り上げた文法説明問題である。「給へ」が、尊敬ではなく謙讓の補助動詞と判断せねばならないなど本試験の文法説明問題よりはやや難しかった。

問3 源宰相の心情を問う設問だが、源宰相の文の「死ぬるものにもがなと思ひたまふれど」を正確に解釈できるかを問う良問である。

問4 本試験では出題されなかった和歌の説明問題であるが、和歌の作者が設問によって明らかになっているので、受験者は和歌と和歌が詠まれた状況に照らし合わせて選択肢を吟味することに集中できたであろう。和歌の作者が示されたことは、読解の大きな手がかりになっていて難易バランスがうまく調整されていた。

問5 基本古語の意味を文脈に当てはめて解釈する力を問う設問である。傍線部Y直後の「かかることを何に承り始めけむ」の部分と合わせて、兵衛の君が仲介したことを後悔している気持ちを読み取ることを求めている良問である。

問6 「死に入りて息もせず。頂より^{いただき}黒き煙立ちて、青くなり赤くなりて、～」という結末と源宰相の和歌がどのように繋がるのかに気付かせる良問である。

第4問 清の詩人呉嘉紀が書いた『陋軒詩』からの出題である。呉嘉紀が亡妻を思って詠んだ五言排律「妻の王氏を哭す」を提示した後、生前の妻に頼まれて作った「^{さうえんきた}双燕来る」という七言詩を絡めて補足説明した文章を素材としており、複雑な構成となっている。しかしながら、リード文や注釈によって、読み取りにくさは殆どなかったと思われる。(注)は本試験の9個から18個と倍増したが、適当であった。総文字数は206字で、本試験と比べて22字多かった。

問1 本試験と同様に、昨年度の熟語問題から傍線部の漢字の意味を選ぶ設問に戻った。(ア)の「偕」はやや難しいが、文脈から判断すれば正答が選べる。(イ)は基本的な設問である。

問2 本試験では出題されなかった漢字の読み方を問う基本的な設問である。

問3 漢詩の押韻の規則を問う設問である。押韻のルールのみで正答が判断できる。押韻と詩句の解釈を絡ませて判断させるような出題の工夫がほしい。

問4 漢詩の対句の構成を確認する設問である。「故雄」と「故夫」、「未」と「已」がそれぞれ対応していることを捉えた上で、「亦」が「同様にまた」という意を持つことを確認できれば正答をしっかりと選べる。

問5 妻が作者に詩作を頼んだ時の心情を問う設問である。傍線部の前文とリード文を踏まえた上で、妻の依頼に応えた作者の詩が仲睦まじい夫婦の象徴「双燕」を詠んでいる点を押さえられれば無理なく正答にたどり着ける。

問6 本試験の問2同様、白文の訓読の仕方を、返り点の付け方と書き下し文の組み合わせで選ばせる設問である。比況と願望の句形をおさえた上で、書き下し文の意味を考えて選ぶ必要があり、漢文の基本的な知識と読解力を問う適切な設問である。

問7 傍線部問題でありながら本文全体の流れをつかまえているかどうかを確認する設問になっているところが目新しい。ただ、内容的に「一雄燕」が、妻を亡くして悲しみに暮れる作者のたとえであることは明白なため、選択肢の吟味がそれぞれの末尾の確認だけになってしまった点が惜しまれる。

3 試験問題の分量・程度等

(1) 分量について

追・再試験の本文の字数を本試験と比較すると次のようになる。

	本試験	追・再試験
第1問 評論	約4,400字	約3,900字
第2問 小説	約6,300字	約4,700字
第3問 古文	約1,500字	約1,800字
第4問 漢文	184字	206字

読解時間に大きく影響を与える第1問、第2問の現代文において、追・再試験の分量は本試験に比べてかなり少なかったが、解答時間を考えるとこちらの方が妥当である。

(2) 設問数について

制限時間80分に対して、大問が4問、大問ごとの設問は、第1～第3問は各6問、第4問は7問であった。解答数は、本試験より1つ増えて37であった。

(3) 難易度について

第1問、第2問、第4問の難しさは本試験と同程度かやや易しい内容であったが、第3問は、本文の難しさのため本試験の方が難易度が高い。解答にかかる時間や古文の難しさによって、全体としては、本試験に比べて追・再試験の難易度が低くなっている。今後の工夫を期待したい。

4 試験問題の表現・形式等

(1) 表現について

設問の表現では、「なぜか」、「どういうことか」をベースとして設問の意図に応じて多様な問い方が工夫され、本試験と同じく「最も適当なもの」を選ばせる内容で統一されていた。

(2) 配点について

第1～第4問までを各50点満点とする配点に変化はない。解答一つ当たりの配点も、内容に見合った配点であり、最高点は本試験と同じく8点で本試験との釣り合いもとれていた。

(3) 形式について

選択肢については、6例から二つを選ぶものが2問、残りは全て5例から一つを選ぶ内容で、本試験とは違う形式であった。

5 要 約（意見・要望・提案等）

追・再試験の受験者はごく少数であり、入学者選抜全体に与える影響は小さい。しかし成績資料として本試験と同等の扱いを受ける以上、相互の難易較差は最小限にとどめなければならない。今年度の追・再試験は、文章自体の難易度や選択肢の練られ方、設問の仕方において、全体的に易しくなったという印象を受けた。センター試験が今後どのような方向に向かっていくのかを示唆する意味で追・再試験の果たす役割は大きい。本試験と併せたメッセージ性という点において、その影響の大きさに留意して、文章の素材及び設問のあり方については更に慎重を期してもらいたい。

追・再試験の現代文分野は本試験同様、標準的で受験者の基礎的な国語力を幅広く判定することができる文章で、学習指導要領の趣旨を踏まえた適切な出題である。古典分野の第3問は素材文の難易度が高い本試験と比べると標準的であった。登場人物が少なく、読解の要となる和歌の作者が明記されていたため、文脈把握はしやすかったと思われる。設問に関しては、全体的に本試験のような深みや工夫が感じられなかった点が残念である。

本試験の情報が公開された上での1週間後の試験ということを考慮した時、追・再試験の方がやや難易度が高いことが望ましいと思われる。この追・再試験が、今後の高等学校「国語」の目指すべき指針を示してくれることを切望し、以下に意見・要望等を示す。

- (1) 本年度の追・再試験の本文は高等学校学習指導要領の趣旨を踏まえたものであり、近代以降の文章に関しては、読み取りやすい素材文が選択されていた。ただし傍線部前後の読み取りで正答が判断できる設問や、誤りが指摘しやすい選択肢の作り方は再考の余地がある。本文全体の論旨展開を踏まえた上で正確な内容把握を求めるような設問の工夫を希望する。古典に関しても第3問、第4問ともに話の展開を捉えやすい文章で、設問も標準的もしくは平易な内容であった。全体を通して本試験よりも難易度は低く、本試験との難易度のバランスをとるためには、設問の仕方をもう少し工夫をする必要があったと感じる。
- (2) 第1問について、本試験の本文と同じく、対比を用いて論を展開していく手法は分かりやすいが、筆者の哲学的な思考を正確に読み取っていくには一定水準以上の読解力が必要である。SF映画を素材にしているため受験者には馴染みやすかったと思われる。しかし、問題文前半の読みやすさに比較すると後半は論理の飛躍が感じられ、読解に戸惑った受験者もいたのではないかと。また、問い方は異なるものの同様の事項についての設問があり、問いの立て方に工夫が欲しかった。
- (3) 第2問について、本試験と同様、作品全文を本文としており、一つの小説世界を読み解いていく姿勢が大切にされている。「彼」を主人公としてはいるものの、ほぼ私小説に準じた作品世界を構成しており、主人公の心の動きや人物像が丹念な筆致で描かれているため捉えやすい。さらに本試験と比べると問題文の分量も少ないため、受験者は安心感を持って読めたのではないかと。

(注)の付し方も適当であった。設問に関しては、傍線部前後の読み取りで正答が判断できるものが多くやや平易であった。小説の結末部分における登場人物の心情を読み取らせる問いに関しては、多様な解釈が可能な箇所であったと思われる。

- (4) 第3問について、本試験と同じく平安時代中期の物語である『うつほ物語』が出典となった。『うつほ物語』は本試験の素材文『源氏物語』に大きな影響を与えたとされ、本試験を意識した出題であったと思われる。しかし、複雑な人間関係で主体を読み取りながら読解する必要がある本試験と比べると難易度は高くない。語彙力や文法事項を問う設問は、文脈を抑えながら選択肢を吟味する力を要求していて、古文の基本的な力を問う良問であった。読解力を問う後半の設問は本試験よりも平易で、本試験とのバランスを取る必要があったのではないかと感じる。
- (5) 第4問について、本文の構成は複雑だが、リード文を把握して(注)を援用すれば内容把握は比較的容易であった。設問に関しても、基本的な問題で選択肢の誤りが指摘しやすいものが多く、本試験よりも易化している。設問のあり方、選択肢の作り方には再考の余地があると考えるが、近年、本文では取り上げられていなかった漢詩が出題されたことは評価できる。